

フランス急進社会党研究序説

土倉莞爾著

土倉莞爾著

フランス急進社会党研究序説



9784873542881



1923031032002

関西大学出版部

出 関
版 西
部 大
学

ISBN 4-87354-288-X C3031 ¥3200E 定価 (本体3,200円+税)

フランス急進社会党研究序説

土倉莞爾 著

関西大学出版部

【本書は関西大学研究成果出版補助金規程による刊行】

まえがき

一九〇一年に結党したフランス急進社会党は、それ以前の急進主義運動も含めて、フランス政治史に果たした役割は無視できないものを持っている。急進社会党は、二十世紀になってたびたび政権を担っている。そこに見られる進歩性と保守性は、フランス政治における大きな存在感を残してきた。

しかしながら、急進社会党は、今や過去の政党となってしまうた。第一に、この党が唱えた、非宗教化の問題は今日ではさほどの重要性を持たなくなってきた。フランス革命の遺児としての反共和主義に対する戦いもこれと同じであろう。第二に、かつて競い合った社会党や共産党といった左翼政党との問題でも、明確な対立がなくなってきた。要するに、この政党は滅亡したと言っても過言ではない。

したがって、滅亡した過去の政党を研究する意義はどこにあるのか、ということになる。歴史の研究はそういうものだというあたりきつたりの答えはさておき、ここではいささか古いが、私が、『日仏政治学会ニュース』（第四号、一九八八年二月）に書いた文章の一部を引用させていただく。

「（一九八七年）五月六日、ジョンズ・ホプキンス大学の国際関係学部（SAIS）にサイモン・サーフアティ教授を訪ねた。彼はフランス政治と国際問題の専門家であるが、一九八〇年に設立された外交政策研究所（FPI）の所長もかねており、ここは、アメリカ外交、日米関係、その他世界すべての地域の問題を研究する、学者だけでなく政府関係者、ジャーナリストも参加するセンターとなっている。

サーフアティ教授によれば欧米関係の研究の比重が少しづつ下がってくるのはやむをえないとのことだ

あった。

私はまず、自分がフランス政治史、とりわけ急進社会党を専門に勉強していること、したがってたとえばSDIのようなアメリカの防衛・軍事問題などには興味もなければ知識もないことを率直にのべ、そしていささか自虐的にフランス急進社会党といっても今は研究の価値はないかもしれないが、とつべくわえたのだった。

私の自己紹介的な前置きがまだ終わらないうちに、いやそうではない、とサーファティ教授は答えた。現在のフランスにおいて、かつての急進社会党を支持していた層を、左がとるか右がとるか、どちらがとるかが問題なのである、と。第五共和制の制度の論理からいって、ド・ゴールからボンピドゥーまで保守派と中道派の連合が成功していたとすれば、ミッテランの社会党は従来の革新派に中道派を補充しなければならぬ。その意味でド・ゴールが右からやったことをミッテランは左からやらなければならぬ。平均的なフランス人は共産主義の左翼を好まないと同様に保守的な右翼も好まない。こういった意味でかつて急進社会党を支持していた層は依然としてフランス政治の帰すうに影響をあたえるだろう」。フランスで最古の政党であるが、必ずしも評判のよくない政党、これがフランス急進社会党であろう。このような政党を研究することにどのような意義があるのだろうか。もちろん、いかなる政党でも栄枯盛衰の歴史はあるし、使い古されたスローガンも存在すると思われる。現在の時点で言えば、私のフランス急進社会党の研究は、ソ連の共産党を研究するようなものだったかもしれない。私が大学院生として勉強を始めて最初に手にしたダニエル・バルドネ教授の著書は、急進社会党を、政党構造から分析したものであり、党の特性や党の機構それ自体に内在するダイナミズムを歴史的に明らかにしようとするものであった。議員の党

に対する優越、党員の無関心、党中央機関の脆弱さ、諸派の離合集散などはこの政党の党構造に由来するというわけである。

バルドネ教授についても、悲喜劇的な回顧はある。関西大学考古学資料室の『阡陵』第十六号（一九八七年十二月二十日）に次のように書いたことがある。

「ダニエル・バルドネ Daniel Bardonet 教授に会うことがなかったなら、ギメ美術館 Musée Guimet を訪れることはなかったと思う。バルドネ教授の著書『急進党の構造の変遷』（パリ、一九六〇年）は現在でもフランス急進党研究の基本的な文献だと信じるが、とくに私にとっては修士論文の大半をこの著書からの引用で埋めており、一九七七年五月はじめて渡仏した時に、何が何でも彼に会いたいと思っていた。

念願かないパリ十六区のパッシー Passy にある彼のアパートマンを訪問したのは七月のある日だった。ところが、彼は自分の研究は古いと言ってまともに私の質問に答えてくれなかった。彼は当時国際法に専攻を変えていたし、過去の自分の著書について東アジアの果から来た下手なフランス語を話す若輩にまじめに話をする気はなかったのかもしれない。しかし彼は目を輝かせて言った、自分は日本の美術に興味がある、教えてくれないか、と」。

この引用文の中のキー・センテンスは、バルドネ教授が自分の研究はもう古いと言ったことであった。東アジアの果から来た若者は、フランス語だけでなく、その意味するところもよくわかっていなかったわけであるが、その答えは、本書全体がそうであると言うべきか、ないしはあとがきでふれることにしよう。

なお、本書には急進社会党と直接関係のないいくつかの論文も収めた。その方が全体の趣旨をよく説明で

きると思われたからである。

この書を出版するに当たって関西大学研究成果出版補助金を受けた。満腔の謝意を表すものである。

平成十年十一月二十日

土倉莞爾

目次

まえがき..... 1

第一章 フランス革命とフランス急進派の系譜..... 1

第一節 はじめに 1

第二節 フランス急進派とフランス革命 3

第三節 フランス革命期におけるジャコバン・クラブ 10

第四節 フランス革命以降十九世紀のジャコバン主義 18

第五節 二十世紀のジャコバン主義 25

第六節 おわりに 32

第二章	急進社会党と第二共和制	34
第一節	はじめに	34
第二節	「幹部政党」と「大衆政党」	35
第三節	フランス急進社会主義の性格	42
第四節	その歴史的変遷	51
第五節	その政党的特質	57
第三章	地方史の急進社会党	60
第一節	はじめに	60
第二節	急進社会党における地方組織	61
第三節	ノール県の急進派（一八七〇～一八八九）	73

第四章 急進派議員の政治行動——急進社会党史のなかで——……………105

第一節 はじめに……………105

第二節 議員の優越性……………107

第三節 議員の独立性……………108

第四節 おわりに……………118

第五章 急進社会党と圧力団体……………121

第一節 はじめに……………121

第二節 急進社会党と知的圧力団体……………124

第三節 急進社会党と物質的圧力団体……………131

第四節 おわりに……………137

第六章	アベ・ルミール小論——十九世紀末フランス政治史の一側面——	139
-----	-------------------------------	-----

第一節	はじめに	139
第二節	政治史的背景	141
第三節	カトリックの適応	144
第四節	ノール県の政治的クリマ	151
第五節	アベ・ルミール論	157
第六節	おわりに	161

第七章	初期ド・ゴールの政治思想——「フランスの栄光」という保守主義——	162
-----	----------------------------------	-----

第一節	はじめに	162
第二節	第二次大戦前夜のフランスの保守主義	163
第三節	ド・ゴールの経歴——四十九歳まで	170
第四節	ド・ゴールの初期の著作をめぐって	178

第五節 残された問題——むすびにかえて 184

第八章 M・アンダーソン「フランスの保守政治」(紹介) 198

Malcolm Anderson, *Conservative Politics in France*, London, 1974.

あとがき 210

文献目録・索引 1